

ソーシャルワーク DR&U における普及 (Dissemination) の試み — 「親と子のふれあい講座」出張講座を通して—[†]

中 川 千恵美*
芝 野 松次郎**

I. はじめに

福祉サービスプログラムの開発を、計画的・効率的な一定の開発手続きに従って行おうとする「調査開発 (Research & Development 略して R&D)」の視点からとらえ直してみる必要がある¹⁾。開発されたプログラムを地域に広め、根づかせていくという積極な「普及 (Dissemination)」の試みは、R&D を真に生かすための仕上げの過程である。こうしたサービス・プログラムの調査開発と普及の努力が積み積ねられてこそ、地域内の資源を充実することができると言える。

本論文では、1) 調査開発過程と普及過程を統合した Thomas²⁾ の、ソーシャルワーク実践 DR&U (Developmental Research and Utilization の略) における「普及」の意義と近年の知見を簡潔に紹介し、2) 「親と子のふれあい講座」*** 「普及」を目的とした「親と子のふれあい講座」出張講座の試みを報告し、3) その結果を踏まえて DR&U における「普及」を促す要因について考察する。

II. ソーシャルワーク DR&U における「Dissemination」について

1. Thomas の DR & U モデル における Dissemination

調査開発過程と普及の過程を統合したのは、ミシガン大学のトーマス E. J. である。彼はこの過程を DR & U (Developmental Research and Utilization) と呼んだ。

DR&U の各段階については、桑田・芝野 (1990)³⁾ に詳述されている。第1段階は、問題の選択・分析を行い、第2段階では、介入手続きを開発する。第3段階は手続きの試行・評価を実施する。こうした開発過程を経て効果を評価されたプログラムは、ソーシャルワーク DR&U における第4段階の手続きである普及・宣伝そして第5段階の手続きである採用・実施へと進んでいく。

2. 近年の Dissemination について

“Advances in Developmental Research” (1989)⁴⁾ という論文の中でトーマスは、従来述べ

† 本論文は、日本社会福祉学会第39回全国大会での研究報告と中川千恵美「出張講座の試みと普及の課題」：「親と子のふれあい講座」出張講座と「夜尿」講座」神戸市総合児童センター編『育ちゆくこども—予防、指導の実践と研究』1992 に記述したものを基にし、発展させまとめたものである。

* 関西学院大学カウンセリングルーム

** 関西学院大学社会学部教授

*** 総合児童センターという、広範な地域の児童福祉に貢献することを目的とした機関で、家庭における育児の問題に焦点を当てた「親と子のふれあい講座」の開発過程については、日本社会福祉学会第38回全国大会ポスターセッションにて報告した。

1) 中川千恵美・芝野松次郎・三宅芳宏・山田厚子・大島剛・中島尚美「ソーシャルワーク DR&U (Developmental Research and Utilization) における普及 (Dissemination) の試み—「親と子のふれあい講座」出張講座を通して」『日本社会福祉学会第39回全国大会報告要旨集』1991

2) Thomas, E. J. “Mousetraps, Developmental Research, and Social Work Education” *Social Service Review*, 467-483, 1978

3) 桑田繁・芝野松次郎「ソーシャル・ワーク実践における R&D の試み」『関西学院大学社会学部紀要』61号, 49-82, 1990

4) Thomas, E. J. “Advances in Developmental Research” *Social Service Review*, 579-597, 1989

てきたDR & Uの第4段階と第5段階をDissemination phaseという形でまとめている。彼は普及には、1) 専門家のみならず関心を持つ一般の人々に、種々の情報活動を通してそのプログラムを広く知ってもらう宣伝活動と、2) 実践現場に即した修正を加えながら、採用し活用してもらう活動、という2つの側面があるとしている。

調査開発されたモデルプログラムの効果が実証されていても、その存在が人々に知られていなければ、社会資源とは言えない。調査開発されたプログラムは、宣伝され採用現場に即した修正を加えられながら地域に浸透し、有効な資源として定着するのである。

さらにThomas (1980)の論文では、普及に関する知見や普及の方法論について近年の研究動向を紹介している。

Ⅲ. ソーシャルワーク実践のDisseminationの実際

1. 「親と子のふれあい講座」出張講座の目的

「親と子のふれあい講座」出張講座は、育児不安の軽減と育児を楽しみたいというニーズを満たすと判断された「親と子のふれあい講座」を普及していくことを、目的とした試みである。開発スタッフが、このプログラムを実施してみたいという要望のある機関へ出かけて行き、現場スタッフの協力を得て実施したものである。

こうした出張講座の試行は、普及の第2の側面である「実践現場での採用・実施」につながっていくものと考えられる。出張先の各機関は、その機能面、援助対象、スタッフ数等それぞれ特色を持っている。そうした機関の特性を踏まえて、現場にふさわしいものに、開発プログラムを修正していく必要がある。こうした過程を経て、プログラムの採用・実施へと至るのである。

2. 「親と子のふれあい講座」出張講座の方法

1) 準備段階

今回の出張講座は、次の方法で進めた。準備段階では(1)出張先の選定と(2)出張モデルプログラムの作成をした。平行して(3)対象者(4)準備品(5)セッティングを明確にした。

(1)出張先の選定

まず出張先の選定は、候補となる児童館とのコンタクトから、出張先が決定されるまでの作業である。児童館とのコンタクトは、ふれあい講座事務局である神戸市総合児童センターから、児童館館長会議にて「親と子のふれあい講座」出張講座の件を打診してもらう形でなされた。各児童館で検討後、積極的に実施の意向を表明した児童館が選ばれた。選定後開発スタッフの代表が、児童館に出向き、プログラム概要を説明し出張受け入れの了解を得た。

(2)出張講座版のモデルプログラム作り

出張講座日程は調整後、第1回目のA児童館では、8月1日から8月10日までとなった。

第2回目のB児童館は、後述する実施日時に関する反省点を考慮し、6月26日から7月17日までの4週間でこなった。

開始時間は、親子連れで来館しやすい時間帯ということで、10時からとした。従来1歳半のふれあい講座は、5セッションであったが、第1回目は2週間という時間的制約があり、4セッションとした。

スタッフ数は基本的には5名である。スタッフの役割は、講師(略称=LT:主に講義担当)・フロアディレクター(=FD:講座を円滑に行うために、司会進行を担当)・アシスタントディレクター(=フロアディレクターの補助)・ベビシッター(=BS:母子分離後の子どもの相手)・カメラマン(=CM:ビデオ撮影や記念撮影)である。ただスタッフ数が曜日により変動し、少ない日には、複数の役割を兼ねることもあった。

プログラム内容については、1歳半のプログラムの場合従来5セッションのところ(これ以後Iと省略、表1参照)を、出張講座時では4セッションのプログラム(以後IIと省略、表2参照)に変更した。

IからIIへの推移について述べると(表1、2参照)、第1に、Iで第1~4セッションの後半で取り上げていた、設定遊びをIIでは、第1回目セッションの「遊びの紹介」という形でまとめた。このことで時間の節約にもなり、IIの初回後半にもって来ることで、参加した親子の緊張をほぐし、なごやかな雰囲気をかもしだすことにつながればと考えたからである。

表1 「親と子のふれあい講座」1.5歳プログラム一覧表

時間	第1セッション	第2セッション	第3セッション	第4セッション	第5セッション
9:30	準備	準備	準備	準備	準備
10:00	挨拶	挨拶	挨拶	挨拶	挨拶
10:05	自己紹介 (スタッフ・受講者)	シール貼り (出席確認)	シール貼り (出席確認)	シール貼り (出席確認)	シール貼り (出席確認)
10:10	シール貼り (出席確認)	歌遊び	歌遊び	歌遊び	歌遊び
10:20	オリエンテーション (プログラムの説明)	講義(1)(2) (AV教材)	講義(3) (AV教材)	講義の復習	遊びについて
10:30	ビデオ撮り (親子プレイ場面)	(1)子どもの発達 (2)子どもの発達課題	(3)親の役割 ロールプレイ	ビデオ・フィードバック (親子プレイ場面)	運動会
10:50	アンケート実施 (ハドソンスケール I II)	グループディス カッション	グループディス カッション	Q&A(クエスチ ョンズ・アンド・ア ンサーズ)	アンケート実施 (ハドソンスケール II及び講座の感想) 修了式
11:20	宿題の設定 歌遊び	宿題の設定 設定遊び	設定遊び	設定遊び	修了パーティー
11:30	次週の予告 宿題 I	次週の予告 宿題 II	次週の予告	次週の予告	



表2 出張講座1回目A児童館実施時のプログラム一覧表
親と子のふれあい講座(1.5歳児用)―出張講座バージョン―
★プログラム一覧表★

時間	第1回(8/1)	第2回(8/3)	第3回(8/8)	第4回(8/10)
9:30	準備	準備	準備	準備
10:00	挨拶	挨拶	挨拶	挨拶
10:05	スタッフ自己紹介 参加者自己紹介 (子どもの呼び名紹介)	シール貼り(出席確認)	シール貼り(出席確認)	シール貼り(出席確認)
10:20	シール貼り(出席確認)	10:10 講義(1)(2) (AV教材使用) (1)子どもの発達 (2)子どもの発達課題	10:10 講義(3) (AV教材使用) (3)親の役割	10:10 Q & A
10:30	オリエンテーション (プログラムの説明)			アンケート実施
10:40	アンケート実施			
11:00	遊びの紹介	グループディスカッション	10:50 デモ・ロールプレイ グループディスカッション	修了式 + パーティー
11:20	宿題の説明	宿題の説明	次週の予告	(ビデオ・フィードバック)
11:30	次週の予告	次週の予告	(フリータイム)	
	宿題 I (Q&A)	宿題 II (観察しましょう)		

第2にIIでは、特にビデオ撮りの時間は設けず、子どもたちが自由に遊んでいるところを、随時撮影した。この撮影したビデオによるビデオフィードバックは、IIではIのように時間を取れなかったため、修了式とパーティーの時に、FDが子どもについての簡単なコメント言い添えて行った。

第3に、Iの第5セッションの運動会はIIでは

実施しなかった。時間が取れなかったことと、今回は児童館にある遊具を利用するという趣旨であったためである。この時に作成したプログラムが出張講座の基本となり、2回目のB児童館でも使用した。(表3参照)

(3)対象者

今回の試みを始める際の募集は、1歳半の乳幼

表3 出張講座2回目B児童館実施時のプログラム一覧表
親と子のふれあい講座(3歳児用)―出張講座バージョン―
★プログラム一覧表★

時間	第1回(6/26)	第2回(7/3)	第3回(7/10)	第4回(7/17)
9:30	準備	準備	準備	準備
10:00	挨拶	挨拶	挨拶	挨拶
10:05	スタッフ自己紹介 参加者自己紹介 (子どもの呼び名紹介)	シール貼り(出席確認) うたあそび	シール貼り(出席確認) うたあそび	シール貼り(出席確認) うたあそび
10:20	シール貼り(出席確認) (お子さんとバイバイ)	お話し I ●子どもの発達	お話し II ●親の役割	「反抗」について
10:30	オリエンテーション (プログラムの説明)	●子どもの発達課題		アンケートのお願い
10:40	アンケートのお願い		10:50 デモ・ロールプレイ	
11:00	遊びの紹介	グループディスカッション	グループディスカッション	修了式 + パーティー
11:20	宿題の説明	宿題の説明	次週の予告	(ビデオ・フィードバック)
11:30	次週の予告 写真のお願い	次週の予告	(フリータイム)	
	宿題 I (反抗について)	宿題 II (観察面白メニュー)		

表4 対象となった母親及び子どもについて

第1回目A児童館

NO	母親の 年令	乳幼児 の年令	性別	第() 子
1	32才	2.3才	女	2
2	33才	1.7才	女	2
3	39才	2.11才	女	3
4	25才	2.2才	男	2
5	33才	2.3才	女	2
6	30才	2.1才	男	2
7	29才	1.10才	男	1
8	30才	1.9才	男	2
9	39才	2.1才	女	2
\bar{X}	32.2才	2.1才	男:4 女:5人	

第2回目B児童館

NO	母親の 年令	乳幼児 の年令	性別	第() 子
1	32才	2.3才	女	3
2	32才	2.9才	女	1
3	28才	2.7才	女	1
4	33才	3.10才	男	2
5	31才	3.6才	女	2
6	29才	2.10才	男	2
\bar{X}	31.0才	2.10才	男:2 女:4人	

横軸は、母親の年令・幼児の年令
幼児の性別・出生順位を示し、
縦軸は、各母親を示す。
下段は、母親・幼児年令の平均である。

児を持つ母親を対象者とした。しかし、第1回目のA児童館では、実際の子どもの年齢は1歳7カ月から2歳11カ月となった。母親の年齢は25から39歳であった。第2回目のB児童館では、子どもの年齢は2歳3カ月～3歳10カ月となり、母親の年齢は28～33歳であった。従来の子どもの年齢と比べて、子どもの年齢に幅があった(表4参

照)。

(4)準備用品

準備用品は、大別すると①小物類(テキスト一式、アンケート類、筆記具等)②ビデオ・カメラ機材③おもちゃ類(小さな遊具、プログラム中で使用するおもちゃ)である(表5参照)。それ以外は、児童館にあるおもちゃ(マット、巧技台、感

表5 親と子のふれあい講座(3、1.5歳児用) —出張講座バージョン—
準備品リスト

<p>小物リスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 筆記用具 (鉛筆、消しゴム、など) <input type="checkbox"/> シール、シール台帳 (子ども用出席簿) <input type="checkbox"/> アンケート <input type="checkbox"/> テキスト (講義1、2、3・あそび) <input type="checkbox"/> 名簿 (スタッフ・参加者) <input type="checkbox"/> プログラム一覧表 <input type="checkbox"/> プログラムノート <input type="checkbox"/> テキスト用ファイル <input type="checkbox"/> 教材ビデオソフト <input type="checkbox"/> 宿題 (1.5才用:①Q&A ②観察しましょう 3才用:①反抗について ②観察しましょう) <input type="checkbox"/> 領収書 <input type="checkbox"/> ティッシュペーパー <input type="checkbox"/> バンパース <input type="checkbox"/> 卒業証 <input type="checkbox"/> 記念品 (カード型のもの) <p>※フェースシートはプログラム開始1週間前に郵送済み</p>	<p>ビデオ関係リスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> ビデオカメラ1台 <input type="checkbox"/> ビデオテープ1本 (120分) (ハイクオリティー) <input type="checkbox"/> バッテリー (3本) <input type="checkbox"/> 三脚 <input type="checkbox"/> カメラ <input type="checkbox"/> フィルム1本 (24枚撮り) <input type="checkbox"/> フラッシュ <input type="checkbox"/> ビデオデッキ1台 	<p>おもちゃリスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 小さな遊具 <ul style="list-style-type: none"> ・ぬいぐるみ <input type="checkbox"/> 「遊びの紹介用おもちゃ」 <ul style="list-style-type: none"> ・牛乳パック
--	--	--

覚遊具等)を使用した。

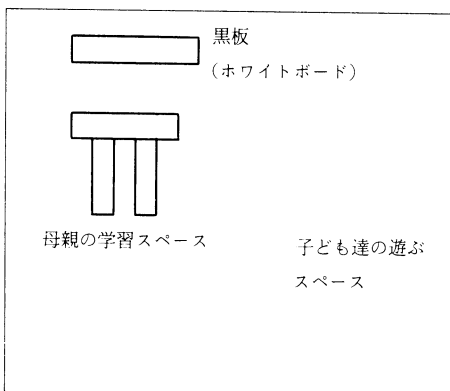
(5)セッティング

A 児童館では球技や運動をする場所 (体育館) の3分の1を母親の学習スペースとし、残りを子どもが遊ぶスペースとした。B 児童館でも同様のセッティングで行った (図1参照)。

2) 実施段階

ここでは「親と子のふれあい講座」出張講座の内容と実施について述べる。

図1 セッティング略図



出張講座回数は先にも述べたが、4回である。1セッションは、約1時間30分とし、各セッションは午前10:00~11:30とした。今回出張講座で実施したプログラムには、「親と子のふれあい講座」開発の基本理念に基づく以下の点が反映されている。

つまり“子育てを楽しもうとする動機が十分であること”・“子供の成長発達およびそれを援助する親の役割について適切な知識をもっていること”・“知識を十分に活かす技術があること”・“育児ストレスから一時的にでも解放されること”・“孤立から一時的にでも解放されること”という子育てを楽しむ5つの条件を盛り込むために、プログラムの基礎となる3つの柱を設定した。

それらは①講義・学習の手続き②親の個別のニーズにこたえる手続き③場の提供・雰囲気作りの手続きである。

1番目の講義学習の手続きという柱は、子供の発達やそれに対して果たすべき親の役割について講義やデモロールプレイという形でわかりやすく盛り込まれている。

2番目の親のニーズにこたえる手続きという柱は、子育てについての一般的な情報・知識だけではなく、現実の家庭生活の中で育児に関する具体

的・個人的な問題や悩みを、スタッフも加わり、母親達が話し合うというグループディスカッションの時間に反映されている。

3番目の場の提供・雰囲気作りの手続きという柱は、まず参加者が母子で楽しく過ごせるよう保育的要素を含めた、挨拶シールはり・歌遊びに盛り込まれている。そして講座中は、子供はベビシッターがみることで、母親は安心して講義に集中できるように配慮する。出張講座の各回の進行については(表2、3)に示した通りである。

各回プログラム概要を以下にまとめる。

①第1回目：オリエンテーション、プリスト

参加した母子とスタッフが、児童館で実施された出張版ふれあい講座において、初めてお互いに顔合わせする時である。何らかの緊張を感じている参加者を場の雰囲気になじませ、講座への導入を促していくことが、プログラムの主眼となる。そこでお互いに挨拶を交わすことから始まり、スタッフ・参加者双方の自己紹介と続く。

また毎回母親だけでなく子どもも参加するので、母子がなるべく楽しく参加できるようプログラム内容の配置を考慮している。最初の挨拶、シール貼りによる出席確認、2回目以降の簡単な手遊び等の保育的なプログラムでウォーミングアップをはかっている。こうして子どもがあたりの様子に慣れて母子分離がスムーズになった時点で、母親が学習場面へ移るということになる。

もちろん母親の元を離れにくい子どもに対して無理じいすることはしないし、母親が講義を聞いている間も、子どもが母親のところへ行き来することは可能である。

参加者とスタッフが少しくつろいだところで、講師がオリエンテーションを実施する。これはプログラム一覧表にそってこれからこの講座でどのようなことをするのか、その概略を母親に理解してもらうように説明するものである。

引き続きアンケートを行った。これは参加した母親に、講座を進めて行く際の今後の参考資料にするという主旨を伝え、了解を得て実施した。アンケートは、ハドソンスケールⅠ、Ⅱ、育児不安テストの3種類である。

講座1回目から母親にとって内容過多になって望ましくないのでは、こうしたアンケートに協力してもらった後に、“遊びの紹介”を行った。ここでは、既成のおもちゃではなく、日常生活の身近にあるもの(牛乳パック、新聞紙、ダンボール箱等)を再利用し、親子で楽しめるおもちゃの作り方を紹介する。実用的なおもちゃ作りの紹介を通じて、初回の緊張感をまだ残している母子が、なごんだひとときを過ごせるように配慮したものである。

そして、宿題Ⅰのプリントを配布した。黒板を利用し、宿題の意図と記入方法を説明した後、次回に持参してもらうように依頼した。最後に次回の予告をし、参加者の動機づけを高めた。

②第2回目：子どもの発達についての講義

第1回目同様のウォーミングアップを済ませた後、講師による講義(1)(2)が行われた。参加者に配布した講義のテキストは、従来ふれあい講座1歳半で作成したものを用いた。ただ今回参加した子どもの年齢が1歳後半から3歳近くまでと幅があったため、こうした年齢差を考慮して、講師が説明を加えた。

本論文では出張講座プログラム概要を述べるにとどまるが、プログラムや講義内容に関する基本的な考え方や詳細は、“よりよい親子関係の援助法”⁵⁾を参照して頂きたい。

約40分の講義終了後、グループディスカッションの時間を設けた。これは、参加した母親が単に受け身的な学習だけではなく、より深く具体的に講義内容を吸収してもらえればという目的から行ったものである。常日頃聞きなれない専門語も使われるため、まず講師の講義が理解されたかを進行役のFDが母親に確認した。親のニーズに応じていくには、日常の子育てとこの講義をどのように結び付けて聴くことができたかが、重要なポイントとなってくる。

そのためFDのリードにより母親の質問を促し、講師やスタッフが個別に助言したり、質問の内容によっては、他の母親の意見を引き出し母親同志がグループで話し合うようにした。こうしてグループの経験を通して、母親が自分達で答えを

5) 芝野松次郎・母子交流研究会・神戸児童相談所「よりよい親子関係の援助法—「親と子のふれあい講座」の開発—」神戸市総合児童センター(編)『育ちゆくこども—予防、指導の実践と研究』1990

見つけ出せるような雰囲気を作り、まとめていけるように配慮した。

その後、宿題Ⅱを前回同様説明し、次回に回収した。宿題Ⅱは、「子どもをじっくり観察しましょう」ということを目的にしたものである。

③第3回目：親の役割について—講義+デモ・ロールプレー—

1、2回同様ウォーミングアップ後、講義が続いた。2回目の講義で取り上げた「子どもの発達」を促していくうえで、親はどのような役割を取れば良いのかという観点から講義がすすめられた。

こうした講義内容を、参加者がより身近なものとして理解しやすくするために、デモ・ロールプレーを実施した。これはスタッフが親と子の役に分かれて、叱り方や食事場面での親子のかかわりかたを2つ示し、参加者に家庭での実際の対応を考えてもらうものである。

ロールプレーを通して母親は子どもとの日ごろのやりとりを思い出すことになる。またポイントを誇張したロールプレーの演技とも相まって、母親から笑いが生じ、グループの雰囲気がなごむ場合が多い。前回同様、講義・ロールプレーをもとにしたグループディスカッションが行われ、次回の予告を伝え3回目を終了した。

④第4回目：宿題へのフィードバック・評価アンケート・修了式/パーティ

最終回は内容が多い。ウォーミングアップ後すぐのQ&Aでは、宿題に対するフィードバックを行った。ここではFDの進行のもとに参加した母親が現在育児で困っている点について個々に詳しく話してもらいスタッフの方から助言を行った。内容によっては、他の母親の意見も聞きグループディスカッションにつなげ、講義内容の理解を再度ここで促して行くことにしている。さらに他の母親が、参考になると良いと思われる「対応」や工夫を紹介した。

その後評価アンケートとして、1回目に実施してもらった3種類と、講義プログラムに関する感想アンケート実施した。

そして修了式+パーティでは、まず参加した子どもが遊んでる様子を収録したビデオを見ながら、子どもの行動の良い点をスタッフが各母親に伝える。

次に講座修了にあたって、継続参加したことへの賞賛と今後の育児への励ましを込めて参加者へ修了証と記念品を送った。これらは軽食をとりながらくつろいだ雰囲気の中で行われた。その際感想を述べ合いながら、母親達とスタッフの交流の場とした。

3. 「親と子のふれあい講座」出張講座の結果

ここでは1) 参加した母親から得たプログラム評価と2) 児童館スタッフに対するインタビューによるプログラム評価と活用の可能性の検討とに大別して結果を述べる。

1) 参加した母親から得たプログラム評価

これらは、最終日第4セッションで時間を設け、その場で記入を依頼した感想アンケートから得られたものである。ここで取り扱う結果は、最終日に出席した1回目A児童館での9名分と2回目B児童館での4名分のものである。

(1) アンケートによるプログラム評価

①プログラムへの意見、②講座内容についての評価、③講座への意見感想の3点について尋ねた。プログラムへの意見、講座内容の結果を集計したものは、表7から表10である。

①プログラムへの意見

これは、出張講座のプログラムを全体的にとらえて意見を聞いたものである(表7、表9参照)。これには母・子に関する項目(1~5)と父に関する項目(6~9)がある。AB児童館ともに、大多数の母親が子供や親子関係を理解するのに役立ったとし、育児が楽しくなった、さらに母親自身の行動に対する好ましい変化を認めている。

母自身の行動変化ありとした参加者の具体的内容には、「講座に参加し、いろんな意見を聞いていの中で、自分も頑張ろうと思え、今までと違った子育てを心のゆとりを持って楽しみながらできるように思えた」「今まで自分の感情で行動していたのを、子どもの立場で考えることも大切だということがわかった」等が書かれてあった。

加えて2回目B児童館では、子供の好ましい変化ありと4名中4名が答えている。その際「同年齢の子ども達の中で人見知りしなくなった」との意見も出ていた。

父に関する項目では、A児童館で9名中4名が講座へ関心を示し、さらに5名が子供の接し方に

表7 プログラムへの意見 第1回目A児童館

質問項目	は	い	いいえ	どちらともいえない
母・子				
1 講座は子どもを理解するのに役立ったか	8人	0人	1人	
2 講座は子どもとの関係を理解するのに役立ったか	7	0	2	
3 講座を受けて育児が楽しくなったか	7	0	2	
4 子どもに好ましい変化が見られたか	5	0	4	
5 自分の行動に好ましい変化が見られたか	6	0	3	
父				
6 夫は講座に関心を示したか	4	2	3	
7 夫は講座に参加すると思うか	0	3	6	
8 夫の行動に好ましい変化が見られたか	1	2	6	
9 子どもへの接し方について夫婦で話し合うことが増えたか	5	2	2	

表9 プログラムへの意見 第2回目B児童館

質問項目	は	い	いいえ	どちらともいえない
母・子				
1 講座は子どもを理解するのに役立ったか	4人	0人	0人	
2 講座は子どもとの関係を理解するのに役立ったか	4	0	0	
3 講座を受けて育児が楽しくなったか	3	0	1	
4 子どもに好ましい変化が見られたか	4	0	0	
5 自分の行動に好ましい変化が見られたか	3	0	1	
父				
6 夫は講座に関心を示したか	0	2	2	
7 夫は講座に参加すると思うか	0	2	2	
8 夫の行動に好ましい変化が見られたか	0	2	2	
9 子どもへの接し方について夫婦で話し合うことが増えたか	1	2	1	

ついて夫婦で話し合う機会が増えたとしている。その中には「今までの子育てに対する反省を夫婦で言い合うようになった」との意見が書き添えてあった。

2回目B児童館では、同じ第9項目の夫婦で話し合う機会が増えたとして1名だけが回答している。1回目A児童館での講座時には、父母が双方で子供とのかかわり方を観察する宿題があったことが、上記の結果に関係しているかもしれない。

②講座内容に対する母親の意見

講座内容について大変好ましくない(1)から大変好ましい(5)までの5段階に分けられた評価に基づき意見を聞いた。(表8、表10参照)

両児童館ともに内容の分かりやすさ・豊かさで高い評価を得ている。B児童館では講座内容全般

表8 講座内容についての評価

質問項目	平均	最高	最低	最頻度値(モード)
1. 内容がわかりやすい	4.3	5	4	4
2. 内容が豊かである	4.0	5	3	4
3. 内容がこれで十分である	3.3	5	2	4
4. 講師の講義内容が役立った	4.4	5	4	4
5. 遊びの紹介が役立った	4.4	5	3	5
6. ロールプレイが役立った	4.8	5	4	5

表10 講座内容についての評価

質問項目	平均	最高	最低	最頻度値(モード)
1. 内容がわかりやすい	5.0	5		5
2. 内容が豊かである	4.2	5	4	4
3. 内容がこれで十分である	3.3	5	1	
4. 講師の講義内容が役立った	5.0	5		5
5. 遊びの紹介が役立った	4.8	5	4	5
6. ロールプレイが役立った	4.8	5	4	5

により高い評価を得ている。

内容の十分さについては、講座内容のどこに焦点を当てていくかを検討する段階で、参加者のニーズをどれだけ取り入れていくかが、評価に影響を与えるものと思われる。第2回目B児童館で最低値「1」が1名あった。その理由として「自分の子ども特有のクセについて相談しなかった」との記述があった。4回という制限内に、参加者個別のニーズとグループのニーズを充足するバランスをどうとるかは、今後も考慮していく必要がある。

個々の内容で1番高い評価を得たのは“ロールプレイ”であった。このロールプレイは、講義内容をわかりやすくし、実践的に役立つものだと言える。というも上述した母親行動の好ましい変化として「(強く短くという)叱り方がわかった」「怒る回数が減った」と書かれていた。これはロールプレイ時に学んだ事を評価している意見と言える。またこのロールプレイが身近な親子のやりとりを取り上げているため、参加した母親の共感を呼び講座の雰囲気ながごんだ。

“遊びの紹介”も最頻度値5と高い評価を受けた。牛乳パック・ダンボールといった身の回りにある物を使ってのおもちゃ作りは、簡単にでき楽しさが参加者につたわったためであろう。

③講座への意見・感想

これは、参加者の率直な意見や感想を聞き、母親の生の声をできるだけ今後の講座にいかしたい

と考え、以下の5項目について自由記述を依頼した。それらは、1. 母子一緒に参加したことについて、2. 宿題について、3. 設備面について、4. スタッフの接し方について、そして5. 児童館で今日の講座が実施されたことについてである。

1. 母子一緒に講座に参加したことについて

母親と子どもと一緒に講座に参加したことについては、「安心して講義を受けられ良かった」と高く評価された。子ども同伴の講座が通常少ないため、こうした講座があることの重要性を述べる意見があった。

また母親にとっては、家庭ではそばにいる子どもを見なければいけないという状態から、講座に参加している少しの間でも、「ほっとして離れられる」という息抜きの要素をあげる意見があった。

そして子どもと離れて、「子どもが初めて出会う他の子どもとどうかわるか客観的に見られた」等子どもの様子を側面的に観察できた意義を述べる意見もあった。

さらに「同年齢の子ども達が集まり集団遊び的なことができた」ことや、「親子ともどもいろんな人に出会えた」ことが、貴重な体験であったとの意見があった。

2. 宿題について

いずれの母親もこれまでの子どもとの関係やふれあいを振り返り、反省し、あらためて見直す機会となったと評価している。

宿題1については、「子どもに対する自分の態度を再確認できた」「子ども自身をじっくりと見れた」とのことであり、宿題2については「子どものことが観察でき新しい発見があった」「観察することの難しさを感じた」等講座の時間外でも、前向きに育児をとらえてもらう刺激材になったようである。

父親の宿題参加については、仕事で忙しいため観察して書く時間がないという状況であったが、中には母親が父親の意見を口述筆記することで、育児に目を向けてもらう機会になったとの意見もあった。

要望については、「宿題の量が多く、書く時間がないので困った」というものや「一度に全部配布してほしかった」等があがっていた。これは特に

今回の出張講座では、日程的にも2回目の講座まで日数が少なかったためではないかと考える。

3. 設備面について

今回は児童館の広い1室を、母親が集まり講義を聞き話し合いを進める場所として机や椅子を並べたスペースと、玩具が随所に置かれ子ども達が自由に遊べるスペースのあるセッティングになっていた(図1セッティング略図参照)。しかし親子は相互に必要なに応じて行き来できるようにした。

このように親の目の届くところで子どもが遊べたことや、子どもも親のすぐそばに来ることができたことを、「安心だった」と評価している意見が多かった。子どもたちの玩具が豊富に用意されているという感想も出ていた。

1. とも関連するが、A児童館では2週間に4回と短期集中的に、またB児童館では週1回で1カ月に渡り4回と、決まった曜日に自宅から外に出かけることや、自分達親子を暖かく迎えてくれる環境があり、部分的ではあるが子どもから解放されるということは、毎日同じ環境で育児に追われている母親にとって、息抜きの意味をもたらしたと思われる。

4. スタッフの接し方について

全般的に温かく、子どもに対しても気長でやさしかったという感想が多く、中にはスタッフの子どもへの接し方が参考になったというものもあった。

これは遊びの中で、ベビーシッターが上手に励ましたりしている場面が、母親にとって良きモデルとなったようである。また母親同志の話し合いの進行時、個々人の意見を平等に聞いていたことを良かったとしている意見があった。

母親同志や母親と子どもだけに限らず、スタッフと子どもといった「ふれあい」がもてたことは、この講座の目的からも大きな意味をもっているものと思われる。

5. 児童館で今回の講座が実施されたことについて

「自宅から近く参加しやすかった」「いつも行き慣れている場所で子どもも慣れていた」との意見があった。さらに「今までこうした講座があっても遠くて参加できなかったのも、近くにある児童館に来てもらい良かった」という意見も寄せられ

ていた。確かに母子にとって児童館は、地理的にも近く普段行き慣れている所であり、違和感や緊張感をもたなくてもいいのではないかと。こうした条件は講座へのアクセス（参加しやすさ）を高めるのではないかと。

また「身近にありながら、今まで児童館を利用したことがなかったが、この講座に参加しその雰囲気があった」とも述べられ、今回のふれあい講座が、地域にある親子が利用できる資源（児童館）を紹介する役目も果たしたとも言えるのではないかと。

そして参加者に地域の共通性もあることから、講座終了後も参加した親子同志が育児に関する様々なことについてお互いに交流を深めていく機会が持ちやすいのではないかと推測される。

2) 児童館スタッフに対するインタビューによるプログラム評価と活用の可能性について

今回の「親と子のふれあい講座」出張講座について、児童館スタッフがどのように評価しているかを知るために、講座終了日に約30分間、児童館館長、指導員の方々に、所定の内容に従ってインタビューを実施した。（表11 児童館スタッフに対する面接調査内容参照）その結果を、(1)受け入れについて(2)実施したプログラムを ごらんになって(3)実施の可能性についてという点にわけて述べる。

(1)受け入れについて

受け入れを決定したのは、児童館での子どものかかわり方や、乳幼児へのこうしたプログラムに児童館側が関心を持っていたからということであった。

受け入れ準備に関しては、AB 児童館とも出張講座を PR し参加者を募集するのに準備期間がも

う少し必要であるとしている。

1 回目 A 児童館では、実施時期の問題が上げられた。本出張講座を行った8月が夏休み期間中であつたため、就学児童（幼稚園児・小学生）が講座時間中も児童館に出入りし、他の遊戯室を利用していた。そのため指導員の方も、彼らへの指導に追われていた。そこで2 回目 B 児童館でその点を考慮し6~7月に実施した。

(2)実施したプログラムを ごらんになって

全体的な印象については、代表者が大学の先生であるということや、事前の打ち合わせ時に、プログラム一覧表の中に講義と書かれてあつたので、硬い雰囲気かと思つていたが、実際の様子を見てみると、なごやかでやわらかい雰囲気で行つていたとの感想であつた。ちなみに2 回目 B 児童館で、講義という言葉は堅苦しいのではとの指摘を受けたので、B 児童館で実施時のプログラム表には、「おはなし」とした。

個々の内容では、親子で参加しているのでシール貼りや遊びの紹介は、楽しんで講座に参加するのに役立ったと評価された。

また宿題は、親が子どもとの具体的な対応に気づくうえで役立ったのではないかと意見が出された。さらにこの宿題について、最終回 Q&A コーナーでフィードバックされ、その折に他の家庭の様子も聞け、参加した母親相互に話し合えた点良かったと評価された。

(3)実施の可能性について

児童館で今回の出張講座プログラムを実施することは人員不足もあり難しく、特に講義などの知識の伝達には専門家が必要であるとの意見であつた。

ただ A 児童館では、身近な素材を使った遊び

表 11 児童館スタッフに対する面接調査

<p>(1)受け入れについて</p> <p>受け入れを決断された理由</p> <p>事前の打ち合わせに満足しておられますか</p> <p>受け入れを準備するとき苦労された点、障害となること</p> <p>受け入れ準備を進めるに当たって、我々への要望</p>	<p>(3)実施の可能性について</p> <p>こうしたプログラムを続けて実施使用と思われませんか</p> <p>実施が難しいのはなぜですか</p> <p>総合児童センターが実施に際して出きることはありますか</p>
<p>(2)実施したプログラムを ごらんになって</p> <p>全体的な印象をお聞かせください</p> <p>個々の内容について気付かれたこと</p> <p>シール貼り、遊びの紹介、歌遊び、講義1、2、3、宿題1、2、おはなし1、2、ビデオフィードバック、修了式、パーティー</p> <p>内容について、他に必要なもの</p>	

の紹介は、子ども達と接する機会も多いので、今後も参考にしたいということであった。B 児童館では、参加した母親グループに今後とも気軽に児童館を利用してもらい、育児について話し合う場を提供する、という形で続けていけたらということであった。

このように両児童館で今回のプログラムを部分的に実施することは可能であるという意見であった。

4. 「親と子のふれあい講座」出張講座の考察

1) 普及にまつわる課題

上述した結果を見ると、参加した母親や児童館スタッフからも、今回の出張講座プログラムは、育児不安の軽減と育児を楽しみたいというニーズに答えていると判断され、プログラム内容は肯定的に評価されたと言える。

従来十分のスタッフがいて5~7回で行ってきたものを今回は児童館という現場で4回に短縮して実施した。これをトーマスのDR&Uの観点から見ると、「親と子のふれあい講座」プログラム内容の普及を検討している段階と言える。こうした出張講を通してプログラムを紹介し知ってもらうということはできたのではないかと考える。

知ってもらったプログラムを現場でどのように採用し活用してもらうかが、普及を促していく際の重要な課題である。

今後具体的には、プログラム内容・講座進行の要点をマニュアル化し、講義のビデオ収録等の準備を進め、部分的なプログラム採用の可能性を促していけるよう検討している。

2) 普及を促進する要因

今回の出張講座の試みから、開発プログラムが今後各現場で採用され普及していく要因として考えられたものを、以下に述べる。

(1) 採用する現場や機関のニーズを検討する

開発プログラムを採用しようとする現場や各機関で、どういったニーズがあって、そのプログラムを利用しようと思ったのかと言うことである。つまりその現場でプログラムを受け入れようと思うに至ったニーズを明確にしていく事が大切であ

る。こうしたニーズを明らかにすることで、現場にとっても、プログラム採用の動機づけを高めることにつながるのではないかと考える。

(2) プログラム内容を採用する現場スタッフに理解してもらう

まず、プログラムで使用する教材がテキストやビデオ教材としてパッケージとなっていることが望ましい。

続いて採用する機関スタッフが、こうした開発プログラムを活用し、そのプログラム内容を十分理解できるように、その実施手続き・技術といったプログラム運営に関するフォーマットをまとめることが必要である。

さらにそうしたフォーマットを利用するためのワークショップやミーティング等を開催することができれば、採用を確実なものにしていくと考えられる。またそうした機会が、開発したスタッフと採用機関スタッフ双方がプログラム活用をめぐって交流する場ともなる。

(3) 採用する機関の現状（人員・組織形態・機能）に応じたプログラムを双方のスタッフで話し合う。

今回の出張講座の試みは、児童館で実施した。児童館にはそれぞれ固有の機関特性がある⁶⁾。プログラムを採用する個々の機関の特性を十分理解し、現状に応じたプログラムを検討するのである。

その際プログラムを担当できるスタッフ数や機関の他の業務・行事との関係、プログラム参加者数、採用時予算の有無等を特に考慮していくことが重要である。

これらの要因は、個々に独立したものではなく、相互に関連しているものである。

Backer, Liberman, Kuehnel (1986)⁷⁾らの研究では、開発したプログラムを新たな現場で活用・採用することに成功したモデルの分析から、普及を促進する要因を次の6つに分けている。

それらは、1. プログラムに関する知識がある人と利用する機関の人達双方の人間同志のふれあいをつくる。2. 利用機関が採用する内容を理解でき

6) 神戸市社会福祉協議会『児童館運営の手びき』1988

7) Backer, T. E. Liberman, R. P. Kuehnel, T. G. "Dissemination and Adoption of Psychosocial Interventions" *Journal of Consulting and Clinical Psychology* 54 (February 1986) 111-118

るように助言する。3. プログラムを広める側（開発機関）と受け入れる側（採用する機関）に組織的な合意がある。4. 利用する機関のスタッフが続けてやってみるやる気を尊重する。5. 新しいプログラムがうまく使ってもらえるかという適応性がある。6. 確実にそのプログラムが成功するという有用性・実績がある。ということである。

こうした要因と我々が考察した要因とは重なり合うところも多い。今後こうした Backer ら (1986) や普及の方法論に関する Paine (1984)⁸⁾ の知見を累積し、普及過程や具体的な方法の研究につなげていく事が大切である。

IV. おわりにかえて

新たな展開：出張講座の「採用」（DR&U 最終段階）に向けて

こうした出張講座での経験を踏まえ、新たな展開がある。B 児童館での出張講座実施時に、神戸市内保健所の保健婦の方々が、来館し見学された。

その保健所で、92年1月から2月にかけて、1歳半児母子を対象とした“子育て教室”が5回行われた。その開催に向けて我々開発側スタッフと保健所のスタッフが話し合い、「ふれあい講座」出張講座のプログラムを基本にし、保健所での実施に見合う形で、内容が変更された。

“子育て教室”には、我々計3名のスタッフも講師という形で3回参加したが、実質的な運営は保健所スタッフ（保健婦、衛生担当事務員、栄養士、保育担当者〈地域保育所保母、保健婦〉）によるものであった。ふれあい講座で開発されたプログラムが、保健所という実践現場に部分的ではあるが、普及し採用されたとと言える。

その後、保健所で成果があったと判断され、92年度も引き続き“子育て教室”が1クール4回で3クール実施されることになった。

今年度は、我々ふれあい講座スタッフは計2名が2回参加する予定である。保育担当者は、在家の保母資格者、保健婦となった。

このように開発プログラムの部分的な採用に至

った経緯や採用されたプログラムが活用される現場において定着していく様子についてもさらに研究していくことになろう。

謝辞

今回の出張講座実施にあたっては、多くの方々のご協力を得た。各児童館との連絡調整にあたって下さった神戸市総合児童センターの堤参事、出張講座実施時にあたり貴重な示唆をいただきご協力下さった神戸児童相談所判定係主幹三宅先生をはじめ山田・大島判定員、出張講座スタッフとして活躍下さった中島さん金井塚さんをはじめとする神戸母子交流研究会の皆様、何よりも出張講座現場を提供して下さった児童館の皆様、最後になりましたが保健所の皆様に、この場を借りて深く感謝致します。

8) Paine, S. C. "Models Revisited" in Paine, Bellany, and Wilcox, eds., *Human Services That Work : From Innovation to Standard Practice*, Baltimore : Paul H. Brookes, 1984